

ライアー

この街は好きになれない。一番の理由はスモッグだ。

上海オリエンタルパークホテル四十八階のスイートルームにはまった窓からは、市街部をすっぴりとおおった、黄色いカーテンのようなスモッグが広く見渡せる。

小学校に上がるまで智さとしは小児喘息をもっていた。二年生くらいから症状は軽くなり、五年生になった今は、ほとんどでない。それでも、これだけ空気の悪いところにいると考えると少し不安になる。

父親の洋祐ようすけも子供の頃喘息もちだったというから、遺伝したのだろう。今日は二人で杭州にでかけている。電車で片道一時間かかるといふし、湖で有名な名勝だから、上海より空気がきれいなのを願う他ない。

わたしは瀬戸圭子せとけいこに会うことになっていた。瀬戸圭子は高校時代の友人で、今は商社マンに嫁いでおり、その夫が上海駐在中という設定だ。

瀬戸圭子は、わたしと洋祐の結婚式にも出席した。研究所の所員で、互いに偽装カバが必要なとき、同級生になったり姉妹を演じたりしてきた。

万一に備え、瀬戸圭子も一昨日から上海入りしていた。洋祐はわたしの交友関係にはほとんど興味を示さない。彼には、智とわたしがいればよいのだ。

早く自分だけの家族が欲しかった、とわたしにいったことがある。母親を十六歳のときに亡くし、実の父親とそりが合わなければ、そう思うものかもしれない。

携帯が振動し、わたしはイヤホンマイクをつまんだ。

「は？」

「今、エレベータに乗った。かなり効いている。状況は？」

サポーター役の柘崎が訊ねた。

「問題ない」

わたしは答え、ソファから立ちあがった。

指定暴力団浜山連合船井会唐仁一家の組長、木筑定夫は名門私大を卒業後、稼業を継ぐために一家に所属した。いけいけの武闘派で鳴らした父親と異なるのは、数字が読めたことだ。大学時代、潤沢な小遣いを株式投資でふくらませ、卒業時には足立区内にアパートを二棟所有していた。そこに入居していたのは大半が不法滞在の外国人で、彼らから高い家賃をとることでさらに資金を増やした。

さらに一家に入ってから、投資の領域を土地投機に広げ、腕を見込まれた浜山連合の総長に、「金庫番」としてとりたてられた。

浜山連合本部が、東日本を中心にもつ縄張りから吸い上げる、みかじめ、売春、覚せい剤、などの上納金は、年間二十億円を超えるといわれている。

そこから毎年五億円を海外のオフショア銀行を通して中国や香港、ベトナム、カンボジアといった国々の不動産に投資し、洗浄し増やしているのが、木筑定夫だ。昨年、父親が死去し、正式に組

長を襲名した。その際唐仁一家は、浜山連合の序列三位にくり上がった。今年四十歳の木筑が十年以内に浜山連合の若衆頭になるのはまちがいないと見られている。

委員会が木筑を対象者に指定した理由は、浜山連合の経済力を急速に成長させたその手腕にある。日本全土で三番目の勢力と目されている浜山連合がこの先、力をつけていけば、やがて二番目の勢力となり、さらに一番の勢力をもつ組織とこれまで以上の摩擦は避けられない。

木筑は中学時代、将来の夢と題した作文で「天下をとる」と書いている。つまり、最大組織との抗争も辞さない可能性が高いというわけだ。

委員会はそれを憂慮した。さらに木筑は、海外への不動産投資の過程で、上海やタイ、ベトナムの犯罪組織とのコネクションを作りあげている。ことに上海の新興組織「血性幫」^{グン}とのつながりは深く、「血性幫」の首領、楊仲則とは互いに朋友を称している。「血性幫」は、この十年のあいだに急速に上海市内で勢力を拡大した愚連隊系の組織で、その背景には上海系政治勢力の急伸を嫌った、共産党本部の圧力があつた。

北京にまで影響を及ぼしつつあつた上海政府の一部要人を、党本部は汚職の容疑で逮捕、弾圧した。その結果、旧来の犯罪組織の力が削がれ、「血性幫」が成長する余地をもたらしたのだ。

木筑は、唐仁一家の若頭で大学の日本拳法部の後輩だった、藤本栄^{よしもとさかえ}ひとり^{ひとり}を連れただけで訪中している。藤本は木筑のボディガードを兼ねているが、それだけ上海における身の安全に関しては、楊仲則を信頼しているということだろう。

委員会は、日本国内での研究所の処理活動を禁じている。海外での処理活動に関しても「対象者は日本人のみとする」という規則がある。

今回の木筑の訪中をうけて、処理計画をたてたのはわたしだった。

木筑の上海滞在は四日間だ。初日と二日目は、上海の銀行、法律事務所との打ち合わせ、会食が

予定され、三日目の今日、ようやく楊と昼食を共にした。

昼食のあと、木筑は楊と夕方から再び街にくりだすことになっている。木筑はそう酒に強いほうではなく、昼食のときはビールを一杯と、紹興酒を一、二杯しか口にしない。紹興酒を飲むときはオンザロックと決めているようだ。

昼食は、ホテルの五十五階に入った「松龍鎮酒家」を楊が予約したことをわたしたちはつきとめた。

木筑の部屋の冷蔵庫におかれていますすべてのミネラルウォーターのボトルを、昨夜のうちにとりかえてあった。ミネラルウォーターには、無味無臭だが、アルコールの酔いを強くする作用を持つ薬品を溶かしてある。それを今朝飲んだ結果、木筑は酒に酔いやすい体になっている。

その目的は、木筑を昼食後、四十八階の部屋に戻らせることにあった。

上海オリエンタルパークホテルは、全浴室がガラス張りであるのが売りだ。浴槽につきりながら、上海の眺望を楽しむことができる。

ただその施工に関しては、半年前の開業当初から、突貫工事の弊害が指摘されていた。

昼食時に飲んだ酒の酔いを、木筑は一度部屋に戻ってさまそうとする。そこで浴槽に湯をはり、入浴しようと考え、ついでにわずかに開く浴室の窓の把手を押す。

その窓の蝶番は、ストッパーが働かない、欠陥製品だった。浴槽から身をのりだし、幅一メートルほどの窓の把手を押した木筑は、本来なら二十センチしか開かない筈の窓が全開になったせいで、落下して命を落とす予定だ。

蝶番への細工はすでにすませていた。同じような欠陥のある蝶番を、木筑の訪中が決まってからの二カ月のあいだに、他の五つの部屋にしかけていた。これまでのところ落下事故は起こっていないが、クレームが二度、フロントに寄せられている。ホテル側はそれを公にはしていない。開業し

たてで悪い評判がたつのを恐れたのだろう。

クレームのあと、ホテル側も各部屋の浴室窓をチェックし、五つのうち二つを交換している。蝶番は初めからゆるゆるではなく、軽い力で押した程度ならストッパーが働くようになっていて、見落としがでることは計算済みだ。

もちろんたった今わたしがとりかえた蝶番はちがう。少し押しただけで、窓が全開になる仕組だ。わたしは工具を納めたバッグを手にクローゼットに入った。中洋折衷のこのホテルの部屋にはクローゼットやタンス類がやたらにあり、わたしが隠れたクローゼットには使われた形跡がない。

五つの部屋の蝶番をとりかえたのは、宿泊客として入った、研究所員だ。

研究所がおこなう処理は、あくまでも事故や病死と現地当局が判断するような偽装を施すのが鉄則だ。

海外での事故を装ったの処理には、時間と費用がかさむ。研究所の活動が日本国内で可能ならば、費用と手間を大幅に節約できると、所員は思っている。

しかしそうなれば、処理に歯止めがかからなくなると委員会は考えていて、それはわたしたち所員も同感だった。

処理対象者の指定には、最短でも六カ月間の検討期間が設けられることになっている。

検討をおこなうのは研究所ではない。研究所はただの実行機関であって、判断権限をもたない。

もちろん、そんな権限をもつ組織が存在することすら国民は知らされていない。

「研究所」というのは通称だ。「委員会」もまた、通称であるように。

ドアノブにカードキーがさしこまれるカチリという音が聞こえた。

「大丈夫すか」

藤本の声がした。

「ああ。ひと眠りすりゃさっぱりするだろう。まさかあれだけで酔っちまうとはな」

木筑が答える声が聞こえ、ソファにどすんと腰を落とす響きが伝わった。

「疲れたんですよ。きのうおとついと、カンペー、カンペーだったのだから。日本で飲む酒とはちがいますからね」

「年としだよ、年」

「何いってるんですか。オヤジがそれじゃ困りますよ」

「大丈夫だ。夜には復活する。楊がとびぎりの女を用意するといってたからな」

藤本が笑い声をたてた。

「お願いします。俺も楽しみにしてるんですから」

「おう。任せておけ」

「じゃ俺は土産ものでも見てきます」

「ホテルでいいのがあったら、サインで買ってかまわないぞ」

「ありがとうございます。じゃ、失礼します」

ドアが閉まった。

ごそごそと洋服を脱ぐ音と放屁が聞こえた。わたしはクローゼットの中で待った。

やがて軽い躰が聞こえてきた。ゆっくりと二百を数え、わたしはクローゼットの扉を開いた。

ネクタイを外したワイシャツに下半身はトランクスひとつの木筑が、スイートのリビングの長椅子に仰向けに横たわっていた。

ポケットからプラスチックの小壘をとりだし、キャップをひねって外すと木筑に近づいた。端整だが、寝顔にも険がある。

小壘の口を木筑の口もとにもっていく。揮発性の強い匂いに、木筑は一瞬眉をしかめ、いやいや

するように首を傾けた。が、目を開くことなく、顔をかきつづけている。

わたしは小塚をしまうと、木筑の髪をつかみ、軽く頭をゆすった。

木筑は起きなかつた。小塚の中身は強力な麻酔剤だった。中国国内では販売はもちろん使用もされてはいない。万一、解剖で血液検査がおこなわれても、中国公安部に検出されるおそれのない薬を使ったのだ。

携帯のボタンを押した。柝崎が応答すると、

「準備完了」

とだけ告げて切った。

数分で柝崎と副所長の^{おおば}大場が到着し、わたしはドアを開けて迎え入れた。

部屋に入ると、二人はその場でスーツを脱ぎ下着姿になった。持参したシャワーキャップと手袋をつける。

異様な姿だが、遺留物を残さないためだ。わたしもシャワーキャップと手袋をつけている。

「バスルームの準備をする。服を脱がせて」

わたしは二人にいつて、バスルームに入った。浴槽の栓を閉じるとバスフォームを垂らし、湯をだした。

浴槽に湯がたまるのを待つて部屋に戻った。

全裸にされた木筑が横たわっている。わたしは二人に頷いてみせた。

二人は木筑の頭と足を両端から抱え、担ぎあげた。そのままバスルームへと運ぶ。

木筑の体に刺青は入っていない。色白だがひきしまった体をしている。麻酔のせいにか、性器が勃起していた。

「待つて」

わたしはいつて、急いではいていたジーンズを脱いだ。バスルームの中で大場と柘崎に抱えられた木筑の体に、バスタブの湯を手ですくってかけた。死体が乾いていたら、偽装がだいなしになる。それから木筑の右手に窓の把手をつかませた。そして把手を押しした。窓は全開になった。ビル風の唸りが、ぽっかりと開いた窓から流れこんだ。大場が木筑の頭を抱えたまま、浴槽に足を入れた。

「せえの」

柘崎がいい、三人で木筑の体を窓から押しだした。

一瞬、木筑は空中に浮いているように見えた。が、すぐに見えなくなった。

窓から首をだして確認する愚はおかさない。

かすかにドスツという音が聞こえたような気がした。

「撤回」

大場がいい、わたしはバスルームの前に用意しておいた持参のタオルで足をふき、それを大場と柘崎に回した。

すぐに大騒ぎになるだろうが、全裸の落下死体が、この部屋の人間だとわかるには時間がかかる筈だ。

床に足跡を残さないよう、ていねいに体をふいた二人は手早くスーツを身につけた。

ドアを開き、廊下をうかがうと、キャップを外し部屋をでていく。二人は別々のエレベータに乗ってホテルを離れることになっていた。

最後に残ったわたしはジーンズをはき、遺漏がないか室内をチェックした。計画立案者が最後のチェックをするのが決まりだ。

脱がせたトランクスがワイシャツの下にあった。トランクスはふつう最後に脱ぐ。それをワイシ

ヤツの上においた。

問題はない。予測では十分以内にこの部屋に関係者が入ってくる可能性はゼロに近い。棄却域のレベルだ。

ふっと、大学での洋祐の講義を思いだした。

『エクセルの出現で、有意確率は簡単にだせるようになった。その結果、棄却域は重要じゃなくなつたんだよ』

グラフで、検定統計量の端に位置する外側の確率を有意確率という。

わたしが大学で統計学を専攻したのは、あらゆるものを数値のみでとらえる、という仕組に惹かれたからだった。

不意にドアが押し開かれた。予測がくつがえされた。藤本と楊が立っていた。

藤本の目はまっ赤だった。それを大きくみひらき、散らばった木筑の衣服と、立っているわたしを見比べた。

「何だ?! お前」

動転しているのだろう、日本語で叫んだ。

土産ものを買いにいった藤本が、食事のあとアーケードをぶらついていた楊と再会した。楊もまた、このできたばかりのホテルを散策していたにちがいない。

そこへアーケードの屋根をつき破って、木筑が降ってきた。浴室の窓の下はアーケードなのだ。これほど早く二人が駆けつけてきた理由を、わたしはとっさに理解した。

副所長の大場は、かつて長期間にわたり、わたしを監視していた。その結果、わたしには「才能」があると判断し、研究所にスカウトした。

その「才能」は三つだ。ひとつ目は秘密を守る、ふたつ目は殺人の計画を立案し、冷静に実行

できる。最後のひとつは人間の言動を見て、その前に起こったできごとをかなりの確率であてられる。

大学にいき、統計学を勉強しろとわたしに勧めたのも大場だ。

『たぶんお前の才能がそれで磨かれる』

『人殺しの？』

『それじゃない。人間の心理を、行動から逆算できる』

楊が中国語を叫んだ。いつているのは、たぶん藤本と同じことだろう。

楊のボディガードがどこにいるのかが気になった。栃崎の報告では、楊は二人のボディガードを

「松龍鎮酒家」に同席させていた。

その二人は部屋の外にいるのか。それとも理由があって、ここにこられなかったのか。

理由を検討する時間はなかった。

「答えろ！　なんでここにいる?!」

藤本が再び怒鳴った。

無視することにした。二人はまだ事態を把握しきっていない。

問題はこの部屋をどう脱出するかだ。わたしは無言のまま、二人のわきをすり抜けようと試みた。

楊が素早く立ち塞がり、いった。

「藤本さん、この人、木筑さんを殺したですかもしれません」

楊は日本への留学経験がある。

「何ですって」

藤本は信じられないという顔になった。

「オヤジを、こいつが?!」

「なぜこの人、部屋にいますか。木筑さん、裸でした」

大場や栃崎の救助はあてにできない。二人はすでに階下に降り、別々にホテルをでている頃だ。楊の想像は、わたしが女だというのが根拠だ。半ば外れているが、藤本を少し冷静にさせたようだ。

藤本は瞬きし、つぶやいた。

「どうします」

「この人、私が連れていきます。何をしたか、ゆっくり話をします」

楊はいい、腰を低くして身構えた。楊は国立武術学校で少林拳を六年専攻している。

『本当に回避不能であるかを、ぎりぎりまで検討せよ』

処理任務中、事故に遭遇した際の心得だ。

二人が部屋にとびこんできたときから、わたしは検討を始めた。藤本が激しく動揺しているうちは、回避不能ではない、と考えていた。しかし楊の言葉で冷静さをとり戻しつつある今は、回避不能の条件が揃ってきた。それだけに、楊のボディガードの所在が気になった。

楊が中国語でわたしに何かいった。逆らわずにいっしょにこい、といているようだ。

決断した。回避不能。どこか、わくわくしている自分がいた。

「待って下さい」

わたしはいった。二人が目をみひらいた。

「わたしは日本外務省の人間です。総領事館の指示でここにきました。木筑さんに書類をお渡しするためです」

バッグに手を入れた。

「書類だ？ どうやって入った」

「木筑さんが入れて下さったんです。そのあと木筑さんはバスルームに入り、まだでてきません」
「何の書類ですか」

楊が訊ねた。

「わたしは知りません。ただ届けるようにいわれただけですから」

「見せろ」

藤本がいった。

「木筑さんがバスルームにもって入りました」

「そこにいろ。楊さんは見張っていて下さい」

藤本はいつて、バスルームに入っていった。

楊がまた、中国語でわたしに何ごとかをいった。予期していた。総領事館の人間なら中国語が喋れると考えて当然だ。

わたしは楊に頷ぎ、バッグからマカロフ拳銃をとりだした。楊の目がまん丸くなった。安全装置を外し、楊の鼻の中心に向け、引き金を絞った。

バン、という音とともに楊の鼻がめりこんだ。至近距離だったので弾丸は楊の後頭部を抜けた。

すぐに体の向きをかえた。銃声は、藤本にも聞こえた筈だ。バスルームのドアが閉まり、鍵をかけるカチツという音がした。

優れた状況判断だった。楊が銃をもっていたとは考えられないので、銃声が出たとたん楊が撃たれたと直感し、自分の身を守るために最善の行動をとっている。

わたしは部屋のドアに向け後退りした。

倒れた楊の足が床のカーペットをひっかくように動いた。死後の痙攣だ。

ドアノブをつかみ、静かに引いた。廊下に楊のボディガードがいれば、このマカロフをまた使わ

なければならぬ。

廊下の防犯カメラは、カバーを細工して、昨夜のうちに撮影できなくしてあった。

廊下は無人だった。わたしはシャワーキャップを外した。キャップの下はウィッグだ。

シャワーキャップをバッグにしまい、マカロフを部屋の床において廊下へとでた。うしろ手にドアを閉じ、手袋を外した。

エレベーターホールに立つと、ボタンを押した。非常階段を使うことは考えなかった。非常階段の出入口は、各階通路の防犯カメラが撮影している。写されないですむのは、この階だけだ。エレベーター内のカメラまでは細工をしていない。こうなる事態までは想定していなかったのだ。

エレベーターがくると乗りこみ、ロビーボタンを押す。右手の人さし指には水絆創膏を塗って指紋を潰してある。

ロビーでエレベーターを降り、わたしは一瞬立ちすくんだ。ロビーは公安部の制服を着けた警察官で埋めつくされている。

なぜこんなに早く、しかも多くの警察官がいるのだ。その上彼らの目は、わたしだけに注がれている。

知らん顔をして歩きだした。誰も声をださず、止めようとはしない。

エントランスの回転扉の前まできたとき、紺のスーツを着た男が立ち塞がった。四十代半ばくらいで、浅黒い肌をしている。

中国語でわたしに話しかけた。わたしは首をふった。そのとき、視界の隅で、警察官に拘束されている楊のボディガードらしき男たちを見た。

「日本語、大丈夫ですか」

浅黒い男がいった。わたしは男の顔を見つめた。少し眠たげな、曇ったような目つきをしている。

男は身分証らしきカードを呈示した。

「私、中国のお巡りさんです。私ときて下さい」
この状況こそ、回避不能だ。つまり、四十八階でわたしが下した判断は、まちがっていた。

わたしが連行されたのは、上海市虹口区中山北一路にある、上海市公安局の建物だった。そこですべての所持品をとりあげられる直前、時刻を確認した。

午後二時四十分。洋祐と智には、瀬戸圭子と夕食をとってからホテルに戻る、と聞いてあった。遅くて午後十時が限界だろう。とはいえ、わたしがあと七時間で釈放されるとはどうてい思えない。七日後、あるいは七年後、場合によっては永久に釈放されない。

婦人警官二人に預けられたわたしはすべての洋服を脱がされ、彼女らが用意したジャージの上下に着替えた。その姿で写真と指紋をとられる。指紋の採取技師は、右手の水絆創膏に気づき、除光液ではがした上で人さし指の指紋をとった。

それから、窓のない椅子がひとつあるだけの部屋に入れられた。

置いてきたバッグの中には、わたしの身分を明らかにするものは何も入っていない。パスポートや洋祐たちと泊まっているホテルの鍵などはすべて、総領事館が用意したベースルーム^R（基地部屋）においてある。

この状況でわたしがするのは完全黙秘だ。

しかし黙秘をしようにも、誰ひとり尋問に現われない。部屋の天井にはカメラがとりつけられ、監視されていることだけはわかった。

推定で二時間が経過した頃、部屋の扉が開いた。ホテルでわたしを拘束した浅黒い刑事がビニール袋を手に入ってきた。

「バッグは返しません。返すのはこれだけ」

いって、袋をわたしの足もとにおいた。着ていた下着とジーンズ、シャツが入っていた。

「あなた、財布ない、パスポートもない。携帯電話は、もち主の登録のない番号」

わたしは無言で立ちあがり、ジャージを脱いだ。全裸を見られても平気だった。どうせ婦人警官に身体検査されている映像も、この男は見ただろう。

下着をつけジーンズとシャツを着た。ジーンズのポケットにむきだしの人民元紙幣を入れていたが、なくなっていた。五百元だから、たいした金額ではない。

着替え終わると、わたしは男を見た。

「すわって」

男が椅子を示した。言葉にしたがった。

男は首をゆるゆると回し、殺風景な部屋を見渡した。それからひとり言のように聞こえる口調でいった。

「藤本栄さんを、殺人容疑で逮捕しました。楊仲則をピストルで撃って殺したからです」

わたしは何もいわなかった。男はつづけた。

「木筑定夫さんは、事故で死にました。藤本さんは、ホテルを紹介した楊仲則に腹を立てた。それで殺しました」

わたしに向きなおり、見つめた。わたしは煙ったような男の視線を受けとめた。

「本当は全部ちがいます」

男が淡々といった。

「あなたが殺した。木筑さんも楊仲則も。藤本さんもそう、いっています」

わたしは無言でいた。男は手を広げた。

「知っていますか。ここ、『上海刑警八〇三部隊』。八〇三は、番地のことです。上海の悪い人は、『八〇三』と聞いただけで逃げだします。『八〇三』は、楊仲則をつかまえる予定で、見張っていました」

それであれば早く、多くの警察官が出動していたのだ。「刑警八〇三」のことはもちろん知っている。買収に応じず、必要なら容疑者の射殺も辞さない、上海の選抜刑事部隊だ。「八〇三」は、楊仲則を監視下におき、木筑らとの会合も把握していた。そこへ木筑が墜落死したので、ただちに楊のボディガードを拘束したのだろう。拘束を逃れた楊と藤本は、四十八階の部屋にとびこんできた。

「だからありがたいはいけません。楊仲則は犯罪者だが、裁判もせずに死刑はよくないです」
そして考えこむように、顎に手をあてた。

「木筑さんも藤本さんも、浜山連合のやくざですね。やくざが上海ですること、何でしょう」
手をふった。

「はっ。考えてもしかたがない。どうせ悪いことです。上海の土地、株、買ってお金儲けする。楊はもつと悪いことをしていた。工事現場で働いた人の給料、半分とる。おもしろい話します。今日、あなたがいたホテル、造った建設会社に作業員紹介したのは、楊の会社。あのホテルはひどいね。窓は壊れています。防犯カメラも写らない。楊が作業員を安いお金で働かせたから、いい工事じゃない。日本語で、『手抜き』？」

思わずわたしは頷いていた。男は満足したように頷きかえした。

「本当は別の会社が作業員、紹介する予定でした。でもその社長、車にひかれて死にました。楊が、仕事するの断われといったのに断わらなかったから」

男はわたしが脱ぎ捨てたジャージを、ビニール袋に詰めた。

「だから藤本さんが怒ったのも当然です。楊のせいで、木筑さんは窓から落ちた」
わたしを見た。

「そういうこと。あなたはそれでオーケーですか」

わたしは答えなかった。男は、鼻と鼻が触れあうくらい、顔をつきつけてきた。

「オーケーといえ。でないと帰れない」

低い声でいった。

「オーケー」

わたしはいった。この男は、誰かの指示でそう処理させられることになったのだ。おそらくはかなり腹を立てていて、それはわたしに対してではなく、殺人を隠蔽しよう命じた上層部への怒りだ。

上層部がなぜそう決定したのか、わたしにはわからない。何らかの働きかけが、日本政府からあったのだろうか。

もしそうなら、もちろんそれはわたし個人のためではありえない。

男はにやりと笑い、わたしに人さし指をつきつけた。

「あなた、とても優秀な人殺しね。でも失敗がふたつ。バッグの中の道具、日本製。それから楊を殺したピストル、ロシア製」

マカロフ拳銃はもともと旧ソ連軍の制式拳銃で、それを人民解放軍も採用したため、中国国内でライセンス生産をおこなっている。

拳銃を用意したのは、総領事館の防衛駐在官だった。中国製の銃を要求したのに、なぜそんな愚かしいミスをしたのだろうか。

バッグの中の工具についてはどうしようもなかった。中国製の工具で蝶番を細工するためには、

何種類も用意する必要があり、さらに傷を蝶番に残してしまうおそれがあった。

工具も拳銃も、本来なら現場においてくる予定ではなかったのだ。
今後の課題だった。

男に送られ、わたしは上海刑警八〇三の建物をでた。スライド式の門が背後で大きな音をたてて閉まり、車の往来の激しい道路にとり残された。

中山北一路は、上海市の北部を東西に走る道だ。B・Rは、南西の静安区延平路にあった。まっすぐ歩けば二時間くらいの距離だ。

上海にくるのは初めてだが、処理現場とB・R、宿泊しているホテルを中心に、市の地理と公共交通機関の使い方は、徹底して頭に叩きこんである。わたしは歩きだした。

尾行がついていた。当然のことだ。

こちらが徒歩なので、尾行は、車と徒歩のふたつのチームに分かれている。

まずは南に向かい、一時間ほどで、上海駅に着いた。常に多くの人でごったがえす上海駅を使い、尾行をまくためだった。さらに駅の南側に建つアメリカ資本のホテルのロビーに入り、完全にまいたことが確認できるまで、女子用トイレに潜んでいた。

ロビーには時計があった。午後八時を過ぎるまで、ホテルで時間を潰した。その間に安物のトレーナーを一枚置き引きし、着ていたシャツの上にかぶった。

B・Rに歩きついたのは、午後九時近くだった。あたりは学校や病院のある、静かな一角で、B・Rは古い一戸建ての家だ。

家の扉にはカメラがとりつけられている。わたしが扉を押すと、木製のドアが内側から開いた。大場が険しい目をわたしに向けている。

大場は今年、五十二歳になった。ふだんはスキンヘッドにしているが、上海では白髪のウィッグ

をつけていた。背は低いが、ぶあつい体つきは豆タンクのような。かつて警官だった。

大場の奥に柝崎がいた。こちらは長身でひよろりとした体つきだ。年齢は四十一、もと自衛隊の空挺で、フランスの外人部隊に四年ほど所属していた。斜視ぎみの目はどこを見ているかがわかりにくく。

瀬戸圭子の姿はなかった。

「回避不能事態だったのか」

わたしが家に入るとドアを閉じ、大場が訊ねた。

頷き、ソファに腰をおろした。さすがに足が痛かった。柝崎が冷えたミネラルウォーターのペットボトルをよこし、一気に半分近くを飲んだ。

「あなたたちと入れちがいに、藤本と楊が部屋にとびこんできた。最終チェックの最中だった。楊を処理し、藤本がバスルームに逃げこんだんで、銃を捨てて、エレベーターでロビーに降りた。公安部が待ちかまえていた。楊を監視していたらしい」

大場はわずかに眉をひそめた。その表情に昔は惹かれた。

「事前リポートにはなかった」

「上海の総領事館は信用できない。提供をうけた銃もロシア製だった」

「本当か、グリップは赤だったか」

柝崎がつぶやいた。

「それくらいは、わたしも知っている。『刑警八〇三』の刑事がいったのだから、たぶんまちがいないと思う」

大場は天井を見上げた。

「やはり中国での任務は無理があったな。刑事を処理して逃げたのか」

わたしは首をふった。

『八〇三』の本部に連行され、写真と指紋をしっかりとられた。それから二時間放置で、突然釈放された。工具と携帯は没収されたけど」

「そりゃおかしい」

栃崎が笑い声をたてた。妙なところで笑うのは、この男の癖だ。

大場は無言でわたしを見つめていたが、首をふり、息を吐いた。

「妙だな。泳がせたか」

「尾行はついてた。上海駅と近くのホテルでまいたけど」

栃崎がのっそりと、リビングの隅におかれたモニターに歩みよった。全部で五台ある監視カメラの映像をチェックする。

「見張っている奴はいない」

栃崎の言葉に大場は頷き、訊ねた。

「なぜ釈放するか、刑事はいつたか」

わたしは首をふった。

「いわなかったけど、上からの圧力だと思う」

「公安局の？」

「わたしにわかるわけがない。そうなのじゃない？ かわりに藤本を、楊殺しの容疑でつかまえたといっていた。でも木筑も楊も、殺したのはわたしだと知っていた」

大場は宙を見つめた。

「面倒を避けたか。楊と木筑が死んで、それを唐仁一家のナンバー2にしよわせれば、『血性幫』は終わりだ」

「だとしても、ずいぶん早い決断ね。二時間しか、わたしは『八〇三』にいなかった」

「公安局のトップクラス、あるいは上海市のトップの決断か」

「北京の圧力で、『血性幫』は勢力をのばした。それをおもしろくないと思っている人間が、上海市の上のほうにはいるでしょうけど」

大場は小さく頷いた。

「だがそれにしても早い。情報が洩れていたのかもしれない」

柝崎がぎよつとしたような顔になった。

「俺たちに関する？」

「木筑の処理計画が上海側に筒抜けだったとすれば、神村かみむらの釈放は理解できる」

「二人が離脱したとき、ロビーに警官はいた？」

柝崎が首をふった。

「いや。パトカーが一台、すつとんできただけで、木筑のためにきたのだろうと思った」

「わたしが降りたときは警官でいっぱいだった。二人とは十分くらいの差よ」

柝崎は大場を見た。

「じゃあ俺たちも泳がされたってことですか。だったらやばい。ここを離れないと。神村を泳がせてここをつきとめ、踏みこんでくる気かもしれない」

「我々を泳がせたのなら、とうにここはつきとめられている。神村を釈放する必要はない」

大場は冷静にいった。それでも柝崎は落ちつかない顔だった。

「上海市政府は、事件を小さくまとめたかったのかもしれない。日本人のやくざと上海の黒社会の大物が同時に殺され、それが日本人の殺し屋の仕事ということになったら、また北京が干渉してくるのは見えている。そこで木筑の死は事故にして、楊殺しを藤本のせいにした」

わたしはいった。自分でも説得力がないとわかっていた。事前にわたしたちの活動に関する情報が洩れていない限り、これほど短時間にそうした決着をつけようという判断は下せない。そして事前に情報が洩れていたのなら、木筑殺しも、そのあとの楊殺しも、防ぐことは可能だ。

「いずれにせよ、トップレベルの判断だ。官僚はあとから責任を問われかねない案件に速断など決してしない。神村の釈放は、速断だ」

「じゃ、北京？」

わたしは大場を見つめた。北京の圧力が刑警八〇三を動かしたのだろうか。

「情報が洩れたとすれば日本からだ。だとすれば、上海ではなく北京にいくだろう。地方の政府、しかも党中央にいらまれている上海に恩を売る意味はないからな」

わたしは首をふった。想像の限界を超えている。

「どっちにしてもここを離れたほうがいいのじゃないか」

栃崎はいった。

「わたしはホテルに戻る。主人と子供が帰ってるから」

「つかまったら終わりだぞ」

「委員会が動いた、ということはある？ 北京に連絡をとり、わたしを釈放するよう働きかけた」

「何のために？」

「わからない」

大場は少し考え、いった。

「現場の人間すら知らなかった、神村の拘束を委員会が知るのには本来なら不可能だ。それに委員会が我々を助けるために、外国政府と交渉するとは思えないな」

「だよな」

わたしは頷いた。わたしたちは国から報酬をもらっているが公務員ではない。わたしたちの存在を、国が、外に対してでも内に対しても認めることは決してありえない。

認めるくらいなら、わたしたちを殺すか、逮捕して裁判もせずに一生拘束する。

ふと疑問が浮かんだ。国が使っている殺し屋を国が殺そうとするならば、いったい誰にそれをやらせるのだろうか。

だがそんな禅問答じみたことを考えている暇はなかった。

「いく。外をもう一度確認して」

わたしは柵崎にいった。柵崎はモニターの前にすわると、画面を細かくチェックした。

「安全そうに見える」

柵崎はいつて、大場をうかがった。大場は迷っているように見えた。珍しいことだ。

が、頷いた。

「いいだろう。だがここをでてから拘束されたら、どうしようもないぞ。パスポートももっているのだからな」

わたしは頷いた。

朝ホテルをでるときに着ていたワンピースに着替え、私物の入ったバッグを手にB・Rをでた。

あたりは静かだった。少し歩いて北京西路にでると、通りかかったタクシーをつかまえた。それほど遠くはないホテルの名を書いたメモを運転手に見せた。乗車拒否されるかもしれない思ったが、運転手は不満げな文句をひと言ふた言いっただけで、発進させた。

疲れ、そしてひどく空腹だ。だが洋祐は、わたしが瀬戸圭子とおいしいものを食べ、楽しいお喋りをしてきたと思っっている。

バッグからコンパクトをだし、自分の顔をチェックした。場に暴力をふるわれる前に処理したの

は、やはり正解だった。もし顔にアザなど作っていたら、酔って転んだという余分ないいわげが必要になる。

洋祐は、わたしの口からアルコールの匂いがしないことに気づくだろうか。酒を飲まないわけはないが、つきあいの場以外では口にしない洋祐は、アルコール臭に敏感だ。

ホテルに到着すると、部屋に上がった。十時を二十分ほど過ぎている。なるべく大きな音をたてないようにドアを閉めた。

「お帰り」

窓ぎわのソファにすわっていた洋祐がいった。幸い、スタンドひとつしか灯していない。

「ただいま。ごめんね、遅くなって」

答えて、わたしは部屋を見回した。ツインルームの、ベッドとベッドのあいだにエキストラベッドがおかれ、智が眠っていた。

「どうだった？」

わたしはいいながら部屋の冷蔵庫から缶ビールをとりだした。

「ああ、喉がかわいた」

栓を開け、ひと口飲んだ。

「よかったよ。年をとったらああいうところで暮らしてみたいと思った」

洋祐が微笑んでいった。わたしは洋祐に歩みより、頬に唇をあてた。

「まだ飲むのかい？」

「お喋りしすぎた。圭子は、日本語に飢えていたみたい」

向かいのソファにかける前に智のようすをチェックした。

「喘息は大丈夫だった？」

呼吸はふつう、妙な音も聞こえない。顔を半分枕に押しつけ、智は熟睡しているように見えた。

「大丈夫なようだ。遊覧船以外はちよっと退屈していたけど」

わたしは腰をおろしビールを飲んで、洋祐を見つめた。

「停年になったら、杭州に近い大学に再就職する？」

「北京語が話せなきゃ無理だろう」

「勉強すればいいじゃない。大好きでしょ、勉強は」

洋祐は首をふった。

「嫌みから」

「Bしかくれなかったものね」

「一生、いう気か?」

わたしは笑い声をたてた。

洋祐は色白で華奢な体つきをしている。中学、高校と陸上部で長距離をやっていたというのが、その薄い胸を見ると頷けた。

切れ長の目と細い鼻筋は、そっくり智に遺伝していた。

わたしが洋祐の勤める大学の二部に通いだしたのは、二十四のときだ。洋祐はわたしより十歳上で、助教授だった。教師と学生として知り合い、卒業して一年半後、教師は卒業生にプロポーズした。四十になる前に結婚したい、と洋祐はいった。

自分が結婚できるなどと、わたしは一度も考えたことがなかった。

研究所にスカウトされていなければ、ありえない。

別の名前、偽りの経歴を研究所がわたしに与えていたからこそ、可能だった。

神村洋祐と結婚し、佐々木奈々は神村奈々になった。だが佐々木奈々は、わたしの本名ではない。

洋祐はしかし、わたしの経歴になど一切関心をもたなかった。両親も兄弟もいない、といったときも、驚きはまったく見せず、

「そうなんだ」

といただけだ。

目の前にいるわたしだけにしか、洋祐は興味がなかった。

初めて教室で見たときから、好きだったと洋祐はいった。そんな風に女性に惹かれたのは、小学校以来だ、と。

たぶんそれは真実だ。ゲイの噂があったくらい、洋祐は女の子に関心を示さなかった、と披露宴にきた高校の同級生はいった。

ゲイでなければ、数学にしか興味のないオタク。

それはきつと当たっている。ひとり息子が自分と同じ大学に入ったとき、洋祐の父親はすでに自分と同じ道を進ませることをあきらめていたくらいだ。

それはうまくいかない父子関係だけが理由だったのではなく、ごく限られた者を除けば人間への関心が、ひどく薄いという、洋祐の性格に起因している。

息子が見合い以外で結婚相手を見つけるとは、露ほども想像していなかった、と洋祐の父親はいった。

そしてそれが、まさかわたしであろうとは。

「本当に喋り疲れたみたいだな。目がぼんやりしている」

洋祐がいい、我にかえった。

「ほっとしてるの」

わずかに間をおき、わたしはいった。洋祐の目に嬉しそうな輝きが浮かんだ。

「あなたと智のところに戻ってこられて。圭子は仲よしだけど、この街はあんまり好きじゃない。だからご飯を食べて、地元の人がいくつていうスイーツの店でお喋りしていても落ちつかなかった。でもこんな時間になっちゃって、ご免なさい」

洋祐が手をのばし、わたしの手を握った。

「気にしないで。奈々が楽しいと感じることだけをしてほしいと思ってるんだから」

「ありがとう」

わたしは微笑んだ。

「シャワー浴びるわ」

いって、立ちあがった。洋祐が求めてくる予感があった。智を起ささないようにそうするには、バスルームしかない。その前に体を流しておきたい。

洋祐が知るわたしの一から十までのうち九は、偽りだ。

洋祐はわたしを愛している。わたしは洋祐を愛しているか、わからない。そもそも、人を愛するということが長いことわたしにはわからなかった。

わかったのは智が生まれたときだ。あれほどの痛みをもってこの世に出現させた生きものを、大切に思わずにいることは不可能だった。

同時に、なぜわたしの母親は、自らが生み出した息子を、あそこまで愛さなかったのかが、よりわからなくなった。

母親は、弟の望のぞみより恋人を愛した。そして恋人は自分になつかない望を嫌い、折檻せきげんし始めた。初めはかばっていた母親も、あるときから恋人より先に望に手をあげるようになった。そうすると、恋人が自分によくしてくれると気づいたからだ。

望が死んだとき、わたしは十一だった。

その年、初めて人を殺した。

2

帰国に障害はなく、わたしたちは無事、東京神楽坂にある自宅マンションに戻った。

神楽坂にたつマンションを、洋祐は二年前にローンで購入した。洋祐が勤める大学とわたしが週三回出勤する株式会社「消費情報研究所」のどちらにも、乗り換えなく地下鉄で通えるからだ。

洋祐の大学は高田馬場にあり、消費情報研究所は茅場町にある。研究所の表向きの業務はマーケティングリサーチだ。わたしが大学で勉強した統計学を役立てられる職場なのだ。実際、わたしもデータの解析作業をおこなうことがある。所員数は四十名で、その半数は企業や政府機関から委嘱されたデータ解析の業務にたずさわっている。

洋祐がわたしの会社に来たことはない。が、彼にとって統計学の恩師となる北斗大学の倉科教授が研究所の顧問をつとめているのは知っている。倉科教授と洋祐の父は大学の同級生だった。倉科教授が研究所の顧問に就任したのは、洋祐の父親に頼まれたからだ。倉科教授は、研究所の本来の業務が別にあることを知っていた。その業務内容を知った上で引き受けたのは、洋祐の父親への信頼と愛国心によるものらしいが、洋祐がいうには倉科教授は一生を統計学に捧げた「宇宙人のような」人物で、顧問をつとめる会社の実態など、どうでもよかったのかもしれない。

研究所は、設立されて十五年になる。わたしが入社したのは十四年前、大学生だった二十七のときだ。その二年後に結婚し翌年智を生んだ。

結婚後も働きつづけたいたいというわたしの願いを洋祐はうけいれ、家事や子育ての分担に嫌な顔をしたことは一度もなす。

つきあいだした頃から現在に至るまで、洋祐はわたしに対して、怒ったことはおろか、何かをしてはならないと行動を規制したことすらなかった。

いつもおだやかで、弱々しい笑顔を浮かべている。大学で仕事や用事がないときはたいてい自宅にいて、本を読み、頼んでいなくても食事の仕度をしてくれることもあった。料理は決して上手ではないが、食べられないほどひどいというわけでもない。

早くに母親を亡くし、父親の仕事が警察官僚という激務だったせいで、台所に立つことに十代のときから馴染んでいたようだ。

わたしの出勤は、月曜日は必ず、そしてあとの二日はその週のスケジュールによって変動する。

月曜日には、処理対象者としてリストにあがっている人間の行動確認が報告されることになっていた。処理作業をおこなうチームはふたつあり、どのチームが担当するかは、計画立案者がどちらに所属するかで決まる。

具体的には、月曜の会議で、対象者の国外移動の予定が確認されると、その週のうちに処理計画の立案に入る。立案をするのは、処理作業にたずさわる七名で、計画がでそろった時点で検討をおこなう。実行の可能性、準備期間、必要機材の費用などから、最も実行が容易で危険度が低いと判断された計画が採用される。そしてその計画の立案者が所属するチームが作業にあたるのだ。

ちなみに、わたしと柗崎、瀬戸圭子が所属するのがAチーム、上野、石村、原の三名が所属するのがBチームだ。副所長の大場は両チームの作業をサポートし、ケースによってはAB両チームの合同作業になることもある。

処理作業の頻度は、多いときで一年に四回、少ないと二回といったところだ。

研究所がどんないきさつで設立されたのか、わたしは知らない。だが処理作業のメンバーはすべて大場が集めた者ばかりだというのは知っていた。大場と所長の杉井、そして洋祐の父親が、研究

所の設立に最初からかかわっていたようだ。

研究所の存在を知る者はごくわずかだと聞いている。警察官僚、最高検察庁、国家公安委員会の一部から成る委員会が、対象者を決定し、杉井を通じてリストを研究所に送ってくるのだ。

所長の杉井は七十歳で、これまで一度も日本の政府機関に身をおいたことがないという話だった。表にでている経歴は、アメリカの大学を卒業後、米商務省の下部機関に十八年在職、その後日本の商社で十年勤め、コンサルタントを経て、消費情報研究所を開業した。

この半年近く、杉井は体調を崩したとかでほとんど出社していないが、大場と、もうひとりの副所長中嶋が業務を代行しており、支障は生じていなかった。

AB両チームの他に、研究所には処理作業を支援する所員が十名以上いる。外務省や商社、警察、自衛隊などで働いていた者が多い。

設立から十五年を経て、支援部門の所員は大半が六十歳を越えている。

設立時、処理チーム以外はひとりとして四十歳以下の人間がいなかったからだ。存在を秘匿するために、採用する年齢を高めに限定したのだという。

上海から帰って二度めの月曜日の会議で、ますもとけんいち 榎本謙一の渡欧が報告された。榎本は元外務省職員で、不祥事を理由に十一年前に退職。東欧にコネクションをもち、アフリカ諸国への小火器輸出を手がけているロシア人事業家とチェェンマフィアとの仲立ちをおこなっている人物だった。

欧州警察機構が内偵を進めているとの情報があり、リストの優先順位が高い。

榎本は渡欧の際、まずロシアに入国し、モスクワにもつアパートを拠点に、ウクライナ、グルジアへと移動する。ロシア入国後はただちに武装ボディガードがつくため、処理計画の立案は難しいとされていた。

だが今回はロシアではなく、まずパリから欧州入りすることが確認された。モスクワ在住の愛人

も呼び寄せるようだ。

わたしは交通事故か強盗に見せかけて殺す計画を立てた。ボディガードがつかないとすれば、枡本がひとりで移動する時間を狙えば、ひき逃げを装って処理するのが可能なのではないか。パリの治安の悪い地区に、愛人と楽しむためのコカインを買いにいき、事故にあったことにする。ひき逃げが難しければ、強盗にあった形にしてもいい。

いずれにしろポイントは、治安の悪い地区に、どう枡本を連れだすかだ。強引な方法をとるならスタンガンか麻酔剤を用いて誘拐する手もある。

計画会議は金曜におこなわれることになった。四時まで研究所に残り、計画に必要な情報を集めた。

当然のことだが、研究所から任務に関係するデータのもちだしは一切禁じられている。個人用のパソコンやスマートホンも、所内にはもちこめない。

四時になると研究所をでて、地下鉄で神楽坂に向かった。スーパーで買物をし、自宅に帰る。

今日は洋祐の帰宅が遅くなる、と聞いていた。ゼミの学生と飲み会があるのだ。遅くなるといっても、十時を過ぎたことは一度もない。一次会のあとか、せいぜい二次会の途中でひきあげてくるのが常だ。

月曜は智も塾の日で、帰宅は六時を過ぎる。

スーパーで買った材料で、ミートボールと白菜のクリーム煮、インゲンのゴマ和えを作り、ご飯を炊いた。

六時少し過ぎ、智が帰ってきた。

「ただいま。パパは？」

「今日は遅いの。宿題は？」

「塾でやってきた」

智の通う私立小学校は大学の付属だが、高校卒業の時点で半数以上の生徒がよりレベルの高い大
学に進む。

帰るなり制服からトレーナーとジーンズに着替えて、智はダイニングに入ってきた。

「ご飯何？」

「白菜のクリーム煮」

「やった」

好物なのは知っている。男の子なのにハンバーグやカレーが好きではなく、クリームソースで煮
こんだミートボールだけはおかわりする。

「手は洗った？」

「今洗う」

キッチンの流し台に、わたしを押しつけて立った。

「宿題、あとで見るからね」

「いいよ。ご飯のあと、テレビ見ていい？」

月曜は七時から好きなアニメがある。

「八時までよ」

「パパ何時頃？」

「九時か十時じゃない？」

「じゃ九時まで。お願い。頼みます」

洋祐はテレビが好きではない。リビングにテレビの音が流れていると寝室に入ってしまう。やめ
ろ、といわれなくともその空気を、わたしと智は察し、テレビをつけている時間は自然、短くなっ

た。

わたしは笑った。

「それまでにパパが帰ってきたらあきらめなさい」

「うーん。お願い、パパ、今日は遅くなつて」

「パパに電話して頼めば」

「そんなことしたら早く帰ってきちゃうよ」

「かもね。テーブルについて」

向かいあい、いただきますをいって、箸を手にした。

宿題は完璧だった。このままいけばたぶん、智は祖父、父親と同じ大学に進むだろう。

妊娠したとき、わたしは、ただ健康な子供が生まれてくれればいいとだけ願った。これまでの人生を考えれば、子供をもつことすら不相応だと思っていた。

わたしは何ごとも悲観的に考える性格ではない。だが人殺しの才能があり、それを実行してきた人間には、やはり許されない「幸福」がある、と思っっている。ただ子供をもつまで、それが「幸福」だとは知らなかった。

今は、はっきりとわかる。智の存在が、わたしの「幸福」だ。そしてその「幸福」を支える一番の柱が洋祐なのだ。

そう感じるのが愛なのかもしれない。

一方で、わたしはその洋祐にも智にも、嘘をつきつづけている。嘘は、「幸福」を維持していくためには絶対に必要だ。

洋祐は、わたしと智のために自分の人生の大半をさしだしている。彼に嘘はなく、あったとしてもごくわずかだろう。

ひきかえ、わたしの生活は嘘に包まれている。過去も現在も。そして未来、わたしが死に至るまで嘘をつきつづけなければならぬ。

残業で遅くなる、あるいは地方出張する、という口実で、わたしは海外に飛び、誰かを処理する任務を果たす。そしてどれだけ返り血を浴びて帰ろうと、何もなかったように二人のために食事を作り、家の掃除や洗濯をする。

もし任務の途中でわたしが命を落としても、二人に真実が知らされることは決してない。

わたしの死体は、それがもし回収可能なら、秘密裡に国内に運びこまれ、「不慮の事故」にあつたとして洋祐に渡されるだろう。回収が不可能なら、「人生に疲れて失踪した」というシナリオが用意される筈だ。どちらにしても二人は悲しみ傷つくだろうが、妻や母が殺人を職業にしていた人間だと知るよりは、はるかにましだ。

嘘をつきつづけることでしか、この生活は持続しない。

洋祐や智に対し、罪悪感を抱くことはないのか、と洋祐の父に訊かれたとき、

「いいえ。抱いていたら結婚も出産もしませんでした」

と、わたしは答えた。そして訊ねた。

「お義父さんはどうなのですか？」

彼は眉ひとつ動かさず、頷いた。

「私もだ。死んでいった人間に対し、むごいことをした、と思うときはある。彼らに死ななければならぬ理由があったにせよ。だが、家族や周囲に真実を告げないでいるのを、申しわけない、悪いことをしていると感じたことはない。真実を知れば、もっと不幸になるのがわかっているからだ。たぶん君も同じ考えなのだろうな」

洋祐の父親とわたしの考え方は確かに同じかもしれない。ただし、決定的にちがう点がひとつあ

る。

わたしは自分の手をよごしている。洋祐の父親は、組織とそれを運営するシステムを作ったに過ぎない。もちろん彼でなければできなかったことだろうが、他人に人を殺させる行為は、直接手を下すより、ときに残酷ではないだろうか。

洋祐の父親は、だが公平な人物ではある。洋祐がわたしを妻にしたい、といったとき、理由を告げずに反対することもできたのに、そうしなかった。ただ、わたしに妻がつとまるか疑ったとは思わう。

わたしは何度か、洋祐のプロポーズを断わっていた。その性格をより知った今ではなおさら信じられないことだが、彼はあきらめなかった。

「何度でも、君がうんといってくれるまで僕は求婚する。もちろん、君が別の誰かと結婚したいのなら話はちがうけど」

なぜそれほどわたしを求めるのか、わたしには理解できなかった。一方、智が生まれ、三人でいる「幸福」を知ったとき、洋祐はわたしより冷静だった。こうなることは、始めからわかっていたとでもいわんばかりに。

結婚してからの十二年間のうちの半分は、わたしが人生で初めて得た、静かな時間だった。誰かを待つ場所、待たれる場所をもつのが、これほど心に平穏をもたらすとは知らなかった。

洋祐には本当に感謝をしている。その気持を伝える最良の方法は、「ありがとう」というのではなく、彼と智のそばにいる努力をつづけることだと、最近思うようになった。

その努力とは、嘘をつきつづけ、人を殺す任務にベストを尽くすことだ。任務に失敗すれば、彼らはわたしを失う。

任務を離れることは、まだ考えていない。なぜならわたしには、世の中の大半の人間より効率よ

く、この仕事を遂行できる能力があるからだ。それは、才能だといった大場の言葉が裏付けている。家族にはもちろん、研究所の同僚にも決して認めはしない。だが、わたしは人殺しに喜びを感じるときがある。

その夜、十時を過ぎても洋祐は帰らなかつた。珍しいことだった。ふだんより遅くなりそうなき、それは二年に一度あるかないかだが、洋祐は必ず電話をしてくる。それすらないのは、結婚して以来、初めてだ。

十一時になるとわたしは智に寝るよう、告げた。

「珍しいね。パパ、こんなに遅いつて」

「たまにはいいのじゃない」

「寛大だな、ママ」

「そう？」

わたしがにらむと、智は恐しげに首をふった。

「あまりパパを怒らないであげてね。男は大変なんだよ、いろいろ」

「そういう生意気いうなら、あなたをかわりに怒ることにする」

「やめて、ごめんさい。やっぱりパパを怒って」

智は勉強部屋に逃げこんだ。

十二時を過ぎ、わたしは洋祐の携帯に電話をするべきかを考え始めた。

だが、電話に応えられる状態なら、とうに彼のほうから電話をしてきている筈だ。それが無いということは、電話ができない状態、たとえば飲み過ぎて酔い潰れてしまったとかにあると考えられる。それ以外の理由、電話をかけられるにもかかわらず、そうせずに遅くなっているなら、それは洋祐の選択だ。

わたしから電話をするのは、その選択を尊重しない行為になる。

もし悪い事態、事故に巻きこまれたり、急病になったのであれば、別の人間、救急隊員や警察官が電話をしてくる筈だ。

電話をしないことにした。洋祐はマンションの鍵をもっている。鍵をかけ、ベッドに入った。眠ろう、と心に決めれば、眠ることができる。また何時に眠っても、午前六時半から七時のあいだには目が覚める。

家の電話の音で目を覚ました。枕もとのデジタル時計は「5:17」と示している。

「は？」

「神村さんのお宅ですか」

男の声がいった。眠気が一瞬で覚めた。洋祐は帰宅しておらず、この時間に知らない人物から電話がかかってくると思えば、何か悪い事態が生じたとしか考えられない。

「そうです」

「こちらは新宿警察署です。神村洋祐さんとおっしゃるのは——」

「主人です」

わずかに間をおき、男はいった。

「奥さんですか。これから新宿警察署のほうにおいて願えますか」

「何があったのでしょうか」

「北新宿三丁目のマンションで火災があり、ご主人が巻きこまれたようです。確認をお願いしたいので」

「北新宿三丁目」

奇妙な場所だ。学生との飲み会は、高田馬場か新宿歌舞伎町が多い。北新宿で飲んだという話は

聞いたことがなかった。

次の瞬間、自分が動揺していると気づいた。電話をしてきた男は、確認といった。

「主人は、亡くなったんですか」

「火災現場から男性の遺体が発見され、神村洋祐さんの身分証と携帯電話をおもちでした。それでお電話をしております」

ありえない。洋祐が北新宿のマンションで火災に巻きこまれ、死亡。棄却域だ。

「何かのまちがいです」

「それを、確認していただきたいのです」

「主人はひとりですか」

「署のほうにおいで下さい。私は刑事課の駒形こまがたといいます。受付で私の名をおっしゃっていただけばわかります。あ、それと、奥さん、携帯電話をおもちですか」

「はい」

「その番号を、できれば教えていただけますか」

迷った。手のこんだ悪戯か、新手の詐欺ではないか。

が、警察官、特に刑事には独特の喋り方があり、男の声もそうだった。

「署にうかがったら、お教えします」

答えて、わたしは電話を切った。

智が起きてくるようすはなかった。わたしは寝室に戻り、自分の携帯電話を手にした。大場にかけた。四度めのコールで応えた。

「大場だ」

「今、新宿署の駒形という刑事から電話がかかってきた。洋祐が、夫が、北新宿三丁目のマンション火災で死んだので、遺体確認にきてほしい、と」

駒形、北新宿三丁目、と大場はくり返した。メモをとっているようだ。

「わかった。確認したら、状況を知らせてくれ」

「洋祐のお父さんには——」

「まだいいだろう。確認したあとで」

「了解」

所員の身内に突発的な事件や事故が発生した場合、報告が義務づけられている。

ジーンズに革のジャケットを着け、自宅をでた。智に何かを伝えるとしても、今ではないと思った。話せること、話せないことを見きわめてからだ。

通りかかったタクシーを止め、新宿警察署、と行先を告げた。運転手は無言で発進させた。

早朝の警察署は静かだった。人ひとりが死ぬような事件や事故は、ここでは日常で、よほどの事態が起こらない限り、騒然とすることはないのである。

受付には制服の警官がすわっていた。

「神村といます。刑事課の駒形さんをお願いします」

告げると、わたしの下の名前を確認し、電話の受話器をとりあげた。

やがてノーネクタイでスーツを着けた男がエレベーターから降りてきた。男はまず受付のカウンターの中に入り、制服警官のメモに目を落とした。

「神村、奈々さん？」

わたしは頷き、男を見つめた。四十代の中頃だろう。顔色が悪く、目の下に濃い隈がある。視線はどこかたとえばどころがなく、上海で会った刑事をわたしは思いだした。

「駒形です。ご足労をおかけしました。早速ですが、ご主人は昨日、何時頃からおでかけでした？」

「たぶん昼前だと思います。月曜は、午後からふたコマ授業が入っているので」

「奥さんもお勤めですか」

「はう」

すぐに洋祐に会わせようとしなのは、わたしが動揺する前に聞きだせる限りの情報を得ようという狙いなのだろう。

「お勤め先はご主人といっしょですか」

「はいえ」

「どちらでしょう」

「消費情報研究所という、マーケットリサーチの会社です」

「消費情報研究所。で、帰宅されたのは何時頃です？」

「五時前です。子供が六時に帰ってくるので、夕食の仕度がありましたから」

「お子さんはおひとりですか」

「はう」

「ご主人は何時に帰ってこられる予定でしたか」

「昨日はゼミの学生との飲み会があると聞いていました。だいたいそういうときは、九時か十時くらいになるので、先に休んでいました」

駒形は無言でわたしを見つめた。疑っているわけではないだろうが、落ちつかなくさせる効果はあった。

「主人は今、どこに？」

「署内です。昨日でかけられるとき、ご主人に、ふだんと何かちがったようすはありませんでした」

か」

「いいえ」

駒形は頷いた。わたしは訊ねた。

「主人は、亡くなったのですか」

「はい」

「火事ですか」

「火災になる前にガスが洩れていました。古いマンションでした。ガス管に問題があった可能性もあります。いずれにせよ、おかれていた冷蔵庫の火花が引火したと、消防のほうでは見ているようです」

「火事は何時頃あったのですか」

「一一九番通報は、午後十時四十九分でした。最初にガス爆発があり、火がでたようです」

「何をしていたんでしょう」

「は？」

「主人はそこで何をしていたのですか。北新宿のマンションに知り合いがいると聞いたことは一度もありません」

駒形は答えなかった。受付の中で立ちあがり、

「ご案内します」

といった。

地下に降りた。「霊安室」と書かれた扉があり、中に白布をかけられたストレッチャーが二台おかれていた。頭の側に小さな線香立てののったテーブル以外、何もない。

「こちらがご主人ですか」

駒形が、入って右側のストレッチャーにかけられた白布を小さくめくった。

洋祐の頬は少しススで黒ずんでいた。それ以外、見える範囲に傷はない。死体なのに妙に顔色が赤いのは、一酸化炭素中毒によるものと気づいた。わたしは頷き、訊ねた。

「焼け死んだのではないのですか」

髪はさぶ濡れだ。

「建材が燃えたときにでるガスを吸われて意識を失った。首から下は、重度の火傷を負われていますが、苦しまれてはいないようです」

目を閉じているだけだ。体をゆすれば目を開く、そんな気がした。

額に触れた。冷えきっていた。生きてはいない。わたしは自分の吐くため息を聞いた。

「そして」

駒形の声に我にかえった。

「こちらが、同じ部屋にいた女性です」

左側のストレッチャーの白布をめくった。顔の半分が炭化した、見知らぬ女の顔があった。くつきりとした目鼻立ちで、年齢は三十から四十のあいだくらいに見える。わたしは意識して目をそむけた。

「ご存知の方ですか」

「いえ。どなたです？」

「身許がわかりません。ご主人と異り、火災現場からは、この女性の身許を示すものは何も見つかりませんでした」

「何も？」

わたしは駒形を見つめた。

「財布も電話も？」

「財布の入ったバッグはありましたが、現金だけです。あとは避妊具が複数入っていて、携帯電話はなかった」

「避妊具」

「コンドームと消毒薬入りのクリームです」

「つまり——」

「売春を職業にしていた可能性はあります」

ありえない。洋祐が売春婦を買うことは決してない。

「すると火事があったのはこの人の部屋ですか」

「さや」

駒形は否定した。

「部屋の借り主は別にいます。ワンルームで、家具はベッドとソファ、冷蔵庫くらいしかおいてなかった。おそらくレンタルルームとして使われていたと思われます。きちんとしたものではなく、モグリのレンタルルームです。バスタオルとシーツの予備がおいてあって、使ったあとはとり替えるんです。ホテルを使うより安上がりなんで、何人かの女たちが共同で借りていることが多い」

「鍵は？」

「一階の郵便受においてある。郵便受をのぞいて鍵がなければ使用中というわけです。火災のあった部屋がそうなのかどうかはわかりませんが、たいていはそういう使われ方をしています」

「借り主は誰です？」

「調査中です」

わたしは黙った。駒形は無表情のまま、わたしを観察していた。

「こういうことですか」

わたしは口を開いた。

「主人はこの女の人とお金でセックスするために、北新宿のレンタルルームに入った。その部屋のガス管が壊れていて火事になり、二人とも死んだ」

駒形はわずかに間をおいた。

「検証がすべて終わったわけではないので、断言はできません。ですが、おそらくはそうでしょう」

「火事のあったとき、二人はいつしよにいたのですか。つまり——」

わたしの訊きたいことを駒形は理解した。

「発見されたとき、ご遺体は洋服を着ていました。ですから、交渉が始まる前か、終わってしばらくしてからと考えられます」

「通報をしたのは主人ですか」

「いえ。同じマンションの下の階の住人です。部屋数は二十以上ありますが、事務所やこういう目的で使われている部屋ばかりで、実際に居住している人間は少ないのです」

わたしはもう一度、女の死体を見た。火傷を別にすれば、醜い顔立ちとはいえない。がそれほど若くもなく、洋祐がなぜ抱きたいと思ったのかはわからなかった。

この女はどこで洋祐に声をかけたのだろう。

街なかなのか。「立ちんぼう」と呼ばれる娼婦が今もいることは知っている。

少し酔って、気がゆるんでいた洋祐に女が話しかけ、ふと魔がさしたということなのか。

「女性の身許については、指紋照合などをしていきますが、なにぶん遺体の損傷が激しいので、難しいかもしれません」

「日本人、ですか」

駒形に目を移した。駒形は首をふった。

「それもまだ、わかりません。歯の治療痕などから判別できるケースもあります。来日して年数がたっていると、日本の歯科医で治療をうけていたりするので」

わたしは頷いた。

「もう少し話を聞かせていただけますか。ここではないところで」
駒形がいった。

「はい。ただ七時までには家に帰して下さい。子供のご飯の仕度があるので」

駒形はわずかに目をみひらいた。

「お子さんはいいくつです？」

「男の子で十一歳です」

「まだ何もおっしゃっていない？」

「でてくるときは寝ていたので」

駒形は小さく頷き、霊安室の扉に手をかけた。

「あの、主人の遺体はいっ——」

「もう少し預らせていただきます。明日、検屍が行われることになっているので。そのあと場合によっては、監察医務院のほうにもっていかなければなりません」

霊安室をでると、駒形はエレベータにわたしを案内した。二階にある、喫茶室のような部屋に連れていかれた。早朝だが人はいる。

駒形はコーヒーをふたつ、ウエイターに頼んだ。運ばれてきたコーヒーはまずかった。

だが喉がかわいていて、わたしは半分近くを一気に飲んだ。

「少し、立ち入ったことをおうかがいしてよろしいですか。もしつらいようなら、また日を改めてもよいのですが」

「大丈夫です。時間が許す限り、ですが」

わたしは時計を見て答えた。あと十分か、十五分というところだ。洋祐の身に本当は何が起こったのかを、できるだけ知りたい。

つまりわたしは信じていない。彼が娼婦を買い、連れていかれた部屋で火災に巻きこまれたなどとは。

洋祐にそれはありえない。そんな人間ではない。

不意に涙がでそうになり、わたしはわたし自身に驚いた。バッグからハンカチをだし、顔にあてた。

なぜ泣くのだ。智ならともかく、洋祐に何かあったからといって、自分が涙を流すとは、思ってもいなかった。

駒形は無言だった。わざとらしい慰めの言葉を口にしないのは、それに効果がないと知っているからか、身内の死に嘆き悲しむ人間を見飽きているからなのか。

「すみません」

やがてハンカチをおろし、わたしはあやまった。

「いえ。奥さんはいへんしっかりしておられる。ふつうなら、こういう状況でご主人を亡くされたらもっと動揺します」

「動揺はしています」

わたしは駒形を見た。

「ただ、感情を表にだすのが得意ではないので」

駒形は頷いた。

「ご主人とは結婚されてどれくらいですか」

「十二年です。結婚した翌年に長男が生まれました」

「ご主人のお仕事は、大学の先生ですね」

「東亜大学の教授をしています」

「ご専門は？」

「統計学です。経済学部と商学部で教えています」

「お酒を飲まれる機会は多かったですか」

「いえ。主人はあまり飲みませんでした。昨日はゼミの学生たちとの飲み会でしたが、たいてい二次会か、せいぜい二次会の途中でひきあげてました」

「すると帰宅が遅くなることはあまりなかったのですか」

「まったくありませんでした」

「では、ご主人といい合いになったりは、しなかった」

「一度もありません」

「一度も？」

驚いたように駒形は訊き返した。

「十二年間で夫婦喧嘩は一度もなかった？」

「はい」

駒形はしばらくわたしを見つめた。

「すると昨夜のようなことは、まったくありえないとお考えでしょうね。ええと、亡くなられたことではありません。外で女性と遊ぶ、というほうです」

わたしは息を吸いこんだ。

「ふつう家で待つ妻は、夫が外で女と遊んでいるとは考えないと思います」

「まあ、そうでしょうが。男だし、そういうことがあってもおかしくないとは思われませんでしたか」

「一度も思ったことはありません」

「とても真面目なご主人だったのですね」

駒形の目を見た。

「ええ。わたしに嘘をついたことすらなかったと思います」

駒形はわずかに困ったような表情になった。

「そうですか。それは——」

いいかけ、口を閉じた。

「でも、事實は事實です。もしかすると主人は、これまでも何度か、そういう遊びをしていたのかもしれない」

「ご主人はおいくつだったのですか」

「五十一です」

「結婚されたときは三十九ですね。それまではずっと独身ですか」

「はい」

駒形は黙った。いいたいことはわかる。

「主人は、昔からの友だちにはゲイではないかと疑われていたそうです。ずっと女の人とつきあわなかったのです」

「すると奥さんは特別だったわけですか」

「そう、いつていました」

「知りあわれたのはどちらですか」

「大学です。わたしは主人の教え子でした」

「ほう。失礼ですが奥さんはおいくつです？」

「四十一です」

「すると十代の頃に知りあわれた」

「いえ。わたしが大学にいったのは二十四のときです。人より遅い入学でした」

「東亜大学ですか」

「はい」

「学資をご自分で貯められていったわけですか」

わたしは無言で頷いた。

「正直、お会いして奥さんがあまりに落ちついていらっしやるので、私は妙な勘ぐりをしていました。ご夫婦関係があまりうまくいっていなかったのじゃないかとね。しかし、奥さんがここまでご主人を信じているのを聞くと、そうではないようだ。それにご主人も奥さんのことを大切にしていたらした」

「とても大切にしてもらいました」

「昨日、ご主人がいっしょに飲んでいたと思われる学生さんの名前などをご存知ですか」

「学生の名前はわかりませんが准教授で小林さんこばやしという方は、もしかしたらいっしょだったかもしれません」

「小林、何という人ですか？」

「それはちよっと。いつも小林君としかいわなかったの」

「わかりました。調べます」

駒形はメモをとった。

「夕方、五時前に帰宅されてから、奥さんはずっとご自宅でしたか」
「は」

「携帯電話の番号を教えてください」
「教えてください。わたしは時計を見た。」

「そろそろですね。ではまたご連絡します」
駒形はいつて立ちあがった。

「いろいろとつらいとは思いますが、お子さんのためにも気持を強くもって下さい。それと、立場のある方ですので、ご主人の亡くなられた件については、極力、マスコミ等には漏れないようにします」

「ありがとうございます」

「では、ご遺体については、また改めて」

新宿警察署の前を通りかかったタクシーに乗りこみ、わたしは智にどう話すかを考えることにした。